

# British & French Ivy

読者が紐解くブリティッシュ・フレンチアイビー

アメリカ由来のアイビーだが、英国的なクラシックやフレンチ・シックを取り入れた独自のスタイルも注目を集めている。英国文化を研究する服飾史家の中野香織さんと、パリに魅せられ、パリをこよなく愛するフォトグラファーの梶野彰一さんが英国、そしてフランス流のアイビーを考察する。

WORDS BY KAORI NAKANO, SHOICHI KAJINO PHOTOGRAPHS BY SHOICHI KAJINO

## ルーツは英国クラシック

メンズファッションの潮流には、イギリスのクラシックスタイルが存在する。1950年代、アメリカの名門大学であるアイビー・リーグの学生から始まった「アイビー・スタイル」も、実はイギリスの伝統的な要素を土台として派生したものだ。アイビー・リーガーたちにとっては、必ずしも意識的なファッションではなく、いわば日常着や制服の制服のようなものであった可能性が高い。その装い一式を1960年代の日本が取り入れ、VANを中心としたクリエイターたちによって日本独自の解釈と定義が与えられたのが「アイビー・룩」である。これは日本で独特の進化を遂げつつ長く愛され、のちにアメリカへ逆輸出されて再評価されたことは広く知られている。そして近年、さらに一歩踏み込んだ「ブリティッシュ・アイビー」という新たな潮流が日本で注目を集めている。

そもそもアメリカン・アイビーと呼ばれるスタイルは、3つがタンのブレザーにボタンダウンシャツ、コットンパンツ、ローファーなどを合わせる軽快で清潔感あふれるファッションが基本である。しかし、その各アイテムの起源をさらにたどれば、1920年代の英国紳士が取り入れていたスポーツウェアやリゾートウェアなど、イギリス式の装いに行きつく。こうした原盤がアメリカ流のカジュアル化を経て完成したのが「アイビー・スタイル」だったというわけだ。結果として、イギリス上流階級の品格をほのかに漂わせるエッセンスが、アメリカを経由して日本に届いたことで、日本の若者たちにとって大きな魅力となっていったと考えられる。

1950年代の日本で起きたアイビー・旋風の際には、その背景にイギリス的な要素は見え隠れしていたものの、憧れの対象はあくまでもアメリカのアイビー・リーガーのライフスタイルであった。ブルックス、ブラザーズや、プレスといったアメリカの名門ブランドがもてはやされ、彼らのシ

ンプルかつ洗練された大学生活に日本の若者は夢を投影したのである。

ところが、ここ1〜2年ほど前から話題になっている「ブリティッシュ・アイビー」というトレンドは、より直接的に英国ブランドやそのテイストを取り入れたスタイリングを特徴としている。たとえばバブアー (Barbour) のオイルドジャケットや、ドレイクス (Drake's) のネクタイやスカーフなど、老舗ブランドの定番アイテムを押さえつつ、伝統と現代性をうまく融合させることが最大の魅力だ。興味深いのは、「ブリティッシュ・アイビー」という名称自体、当の英国ではほとんど聞かれないという点である。これはまさに、日本独自の視点とネーミングによって再構築された、いわばオリジナルのファッション潮流と言える。1980年代にアメリカ由来のアイビー・スタイルを日本が再定義した歴史を思い起こさせる。

こうしたムーブメントの背景には、数年来続くクラシック回帰やレトロブー

ムがある。伝統的なテークアウェイや往年の名品を再評価する動きが高まるなかで、ブリティッシュ・アイビーも同じ文脈の延長線上にある。ただし、当時の厳格なドレスコードを忠実に再現するわけではなく、現代の若者が自由な解釈で取り入れている点にこそ特徴がある。たとえば、クラシックなツイードジャケットにオーバーサイズのパンツを合わせたり、極端に高いマックINTOSHコートにあえてスニーカーを合わせたりするなど、伝統を尊重しながらもルールを柔軟に変化させる姿がいまの時代にフィットしていると言える。

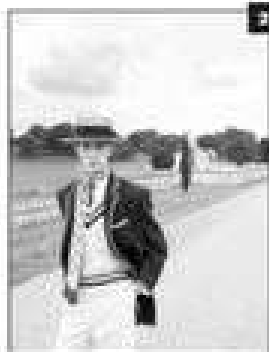
さらに、フォーマルすぎずカジュアルすぎないというバランス感覚も、ブリティッシュ・アイビーが支持を得ている理由の一つだろう。イギリス仕込みのクラシカルな落ち着きと、アメリカ流の軽快さ、そして日本人特有の繊細なアレンジが絶妙に

み合わさることで、オンでもオフでも対応しやすい便利なスタイルが完成する。また、英国の伝統的な素材や縫製技術に裏打ちされたアイテムは、長年の蓄積に耐え得るというサステナブルな側面も持ち合わせている。良質なものを長く大切に使用したいという意識が高まる現在、若い世代にも歓迎されるのは当然かもしれない。

実例を挙げるなら、バブアーのオイルドコットンジャケットは手入れさえすれば数十年単位で使用できる高い耐久性を誇る。メンテナンスを要するごとにオイルドコットン特有の風合いが増し、エイジングが楽しめるのも魅力だ。こうした歴史と物語を伴うプロダクトを、ストリート感覚で若者がさりりと着こなしたり、モダンなシルエットや革新的な配色で再構築したりするのが、いまのブリティッシュ・アイビーの面白さである。伝統的なデザインをリスペクトしながらも、時代に合わせて自由にアレンジする精神は、常に若者文化を牽引してきた普遍的な美意識でもある。

興味深いことに、エディ・スリマンが手がけた最後のシリーズのコレクションは、1920年代にロンドンの若者を中心に結成された社交界グルー

ープ「The Bright Young Things」に由来する。彼らは当時の英国社交界を賑わせた派手なパーティー文化とドレスコード破りで知られ、英国の伝統を背景にしながらも固定観念を軽やかに揺えていくファッション感覚をもっていた。現代のブリティッシュ・アイビーに



も通ずる精神だろう。由緒正しい歴史を下地としながら、そこに新鮮な創意を加えていく姿勢こそが、「アイビー」というスタイルの本質である。

まとめよう。「アイビー」はアメリカで確立されたスタイルでありながら、そのルーツには英国のクラシックスタイルがしっかりと息づいている。そして日本は、日本人特有の繊細な感覚をもって「アイビー」の起源をさらに深く掘り下げ、新たな視点で「ブリティッシュ・アイビー」というスタイルを編み出し、世界のファッションシーンに再び刺激を与えている。伝統と革新が交錯し、新たな価値が生み出される中で、次なる「アイビー」はどんな表情を見せるのか。若い世代が柔軟なアレンジを加えながらも、受け継がれてきた品格を大切に作る姿勢こそ、これからのメンズファッションを切り拓く鍵となる。

「初めて見たような」不思議のチアールズ3世の着こなしには、王室御用店の中でもロイヤル・ワシントン・ブランドを使ったものなど、現代の「アイビー・スタイル」を解釈するヒントが満載。2. 今季のトレンドは、「海のランナー」や「モーリス」といった映画に由来する。伝統的なユニフォームをアレンジするクラシックなスタイルにエディ・スリマンらしい現代性や洗練が漂う。

KAORI NAKANO / 服飾史家、著作家、英国文化、デザイン史、ファッション史、英国王室スタイル、ラジアン・アール・オブ・ファッションの著者、著書に『イギリス・ファッション史』で著者アール・オブ・ファッション・アワードを受賞。10の著書(『英国王室のファッション』など)がある。

